



「マンガが描いた戦争」

継承の広場 2025

@難波市民学習センター



10月10日、継承の広場 2025 を開催しました。京都精華大学マンガ学部教授、吉村和真さんを講師にお招きし、「マンガが描いた戦争～戦争体験や記憶の継承に向き合う～」というテーマでご講演いただきました。以下は抜粋です。

【戦中・戦後のマンガ黎明期】

戦中は「フクちゃん」や「思ひつき夫人」など当時のあるべき生活観を強く反映したマンガが戦意高揚の意図も含んで掲載された。戦後はGHQによる検閲が続く中、絵本やマンガを通じて民主主義的価値観の導入が図られた。いの一に流行ったジャンルは野球マンガである。野球がアメリカ的価値観を育む教育的スポーツとして取り上げられ、軍国主義からの脱却の象徴として使われた。一方で剣道や柔道などは発禁となった。検閲を逃れる形で、SFマンガも現実世界とは違う架空の舞台を描いて人気を集め、手塚治虫がメッセージ性のある作品を多数発表した。

【戦争マンガの登場、そして『はだしのゲン』】

1950年代には大阪を中心に貸本文化が広がり、戦記マンガが多数出版された。1959年には『サンデー』『マガジン』の創刊により少年漫画が台頭し、ミリタリー色の強い戦争マンガが人気を集めた。武道マンガも復活し、戦争との複雑な関係が描かれた。

1968年が戦争マンガの画期となる。ベトナム戦争や学生運動の影響で反戦・反核マンガが登場。中澤啓治の『はだしのゲン』は自伝的作品として注目され、ジャンプに連載される。当時のジャンプはギャグやナンセンス中心だったが、ゲンの登場で社会的メッセージが加わった。編集部の決断により、原爆投下直後の広島を描いた回が、8月6日の週に大増28ページで掲載され、読者に大きな衝撃を与えた。『ゲン』では弟・進次との掛け合いや家族の物語も読者に人気であった。弟の死後、瓜二つのひょうきんキャラ・隆太が登場したことは、少年マンガ誌で連載継続を勝ち取るための「工夫」であったという。単行本は汐文社から出版され、図書館に広まり、現在でも多くの児童・生徒に読まれている。コンビニマンガとしても流通し、作者の中澤さんは多くの人に気軽に読まれることを喜んでいた。

1980年代以降はフィクションやミリタリー要素が強調されるようになる。2000年代には女性作家が登場し、戦争体験者への聞き取りをもとにした作品が増加する。食を題材にしたマンガなどを通じて戦争を身近に感じさせる試みも進む。

【戦争マンガの多様性と訴求力】

沖縄の戦争体験を迫真の筆で描く新里堅進の『ヤンバルの戦い』は再び注目を集めている。松本零士の『音速雷撃隊』はメカ描写のリアリティが高く、エヴァンゲリオンの庵野秀明にも影響を与えた。花村えい子の『君死に給うことなかれ』は実際の特攻兵の手記をもとに描かれている。同様に西岡由香は長崎の被爆体験者から丁寧な聞き取りをしてマンガ化し、『被爆マリアの祈り』を出版した。

辰巳ヨシヒロの『地獄』は衝撃的な展開で戦争の心の地獄を描き、『はだしのゲン』では「黒い目」の被爆者の表現が読者に強い印象を与えた。この史代の『この世界の片隅に』は非体験者によるフィクションながら高く評価された。沖縄では沖縄戦を扱ったローカルマンガが標準語で描かれ、観光客向けに販売されているが、沖縄の人の疎外感や葛藤も反映していると感じさせられる。

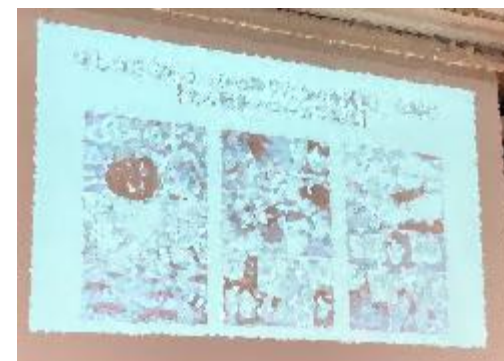
近年では他国の戦争を描いた作品も注目され、ウクライナやパレスチナを題材にしたマンガも登場している。ジョー・サッコの『パレスチナ』は現地取材をもとに描かれ、独自の文法と迫真の画で読者に強い印象を与える。今日マチ子の『cocoon』では戦時下における女性同士の関係も描かれ、ジェンダーやPTSDなど、戦争の複雑な側面が表現されている。

【記憶の継承とどう向き合うか】

戦後80年、戦争体験者が亡くなっていく中で、どのように戦争体験を継承していくのか。フォークソングの『戦争を知らない子どもたち』で出てきたのが1970年だから、すでにこの頃から、つまり55年前から、戦争の記憶の継承は問題化されている。どんな意味で戦争を知らない、知っていると考えるかによって、その切り口は変わってくる。実体験として戦争を



知っている世代は80代あたりまで、より上の方はもう他界されている。しかし私たちは、いろんなマンガやアニメ、テレビ番組等を通じて、戦争について、もしかしたらその上の世代の人たちよりも知識として知っている可能性もある。どんなに虚しいことだったか、悲しいことだったか、厳しい、痛いことだったかというのを、マンガをじっくりと見ることで考えるきっかけとなり得るのです。



人権のふるさと・・・水平社フィールドワーク



10月11日、南部支部女性部・青年部共催で、「水平社設立の歴史を知る」学習会を実施しました。他支部からの参加者も含め21名での学習となりました。

1922年、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と高らかに人間の尊厳と平等をうたいあげて結成された「全国水平社」。奈良県御所市柏原は、水平社創設メンバーのふるさとの地です。

「水平社博物館」では、ボランティアスタッフの案内で展示物を見学しました。御所市柏原は、古くから牛の骨や皮を使って「にかわ」を作る、桐の下駄を作るなどの産業が盛んで強い経済力をもっていたそうです。江戸時代には高取藩の財政難を救ったり自分たちの生活改善を試みたりもしましたが、差別はなくなり、1922年に西光万吉ら地元の青年たちによって水平社が立ち上げられ、後の部落解放運動や様々な差別解消運動につながっていきました。

水平社博物館は、2022年に、全国水平社設立100周年に合わせてリニューアルされました。有名な楽曲や子どもたちがよく知る漫画や絵本なども活用され、差別解消への理念がわかりやすく展示されていました。フィールドワークでは、博物館に近在する西光寺や神武天皇社などの史跡をめぐりながら解説していただきました。短時間ではありましたが、水平社運動への理解を深めることができました。子どもたちに水平社運動を伝えていく者として、一度は訪れるべきところであると思います。互いのことをよく知らないが故に差別が起こること、目の前にある事象から目を背けず、それをどう捉えどう解決すべきかを考え続けることの大切さを改めて感じる学習でした。



【広報部メモ】

先日、市教組主催で開催された「マンガが描いた戦争」の講演会に参加し、貴重なお話を聞くことができました。講師の吉村先生とお話する機会もあり、さっそく『マンガノミカタ』という本をネット注文したので読むのが楽しみです。また、京都国際マンガミュージアムにも足を運びたくなっています。朝晩の空気がひんやりと感じられるようになり、ようやく暑さも落ち着き、ただいま絶賛「食欲の秋」を満喫中なのですが、「芸術の秋」も楽しみたいと思います。(f)



第424回中央委員会開催～悩みを出し合おう！

10月9日、大阪市教育会館東館で第424回中央委員会を開催しました。議長に青木中央委員と武藤中央委員が選出され、議事がすすめられました。はじめに三谷委員長より「日本の教員がOECD加盟国の中で最も労働時間が長いという報道があった。週当たりの平均値では小学校が12時間、中学校が14時間長い。事務作業や保護者対応に取られる時間が長く負担になっている、逆に子どもと話をする時間や教育相談は短いというデータも出ていました。やはり根本的に人員を増やすことで、子どもも教職員も充実感や満足が高まっていくのではないのでしょうか」との挨拶がありました。



続いて、執行部より「当面の闘争推進に関する件」の提案を行いました。その後、討論に2人が参加し、現在の取り組みについての報告がありました。採決では執行部原案圧倒的多数の賛成により、可決・承認されました。最後に改正給特法に関する取り組みの進捗状況が中松書記長より報告され、今後も粘り強く市教委と折衝を続けていく決意が示されました。



武田中央委員(事務職員部) 事務職員部は9月19日に事務職員部委員会を行い、全会一致で人事異動に関する闘争方針案を可決しました。単数配置校が増加する中で定数加配の不安定な状態が続いている課題や、人事交流の在り方等について話し合いました。11月15日に組合員同士の親睦交流を図るため、浪速区民ホールでスポーツフェスティバルを開催します。久しぶりに地区対抗の形式が復活し、大いに盛り上がることを期待しています。組合員の家族の参加も大歓迎です。組織拡大とともに次世代の組合員の育成についても取り組んでいきたいと考えています。

中世古中央委員(西三国小) 北大阪ブロックでは毎年10月後半に在日朝鮮人教育の取り組みでオリニ・ウンドンフェを開催している。参加した子どもたちの記念写真等も計画しているが、今年の夏以降は撮影の問題があって、その取り扱いに困っている。他の場面でも授業実践の記録や引継ぎのために写真を撮ることも多いが、小教研の研究授業でも、現在は会場校以外の教職員が写真撮影を行うことは禁じられている。音楽会であったり学習発表会であったり、どういう実践をしてきたのかを写真や映像の記録から学ぶ場面も多くあったと思うが、難しくなっている。こうなってくると音だけだったらどうなのか、それにしだって保護者からの許諾がいるのか等、不明な点も増えてくる。こういった悩みも組合の場で交流することで、知恵を出し合って解決していきたい。

